

特67

321

明治十八年七月發兌

定價金三錢

白隱禪師述

安心ほこりたたき

一名 佛法ちよぼくれ

京都書林

法藏館西村七兵衛出版

019319-000-6

特67-321

安心ほこりたたき

白隱禪師／述

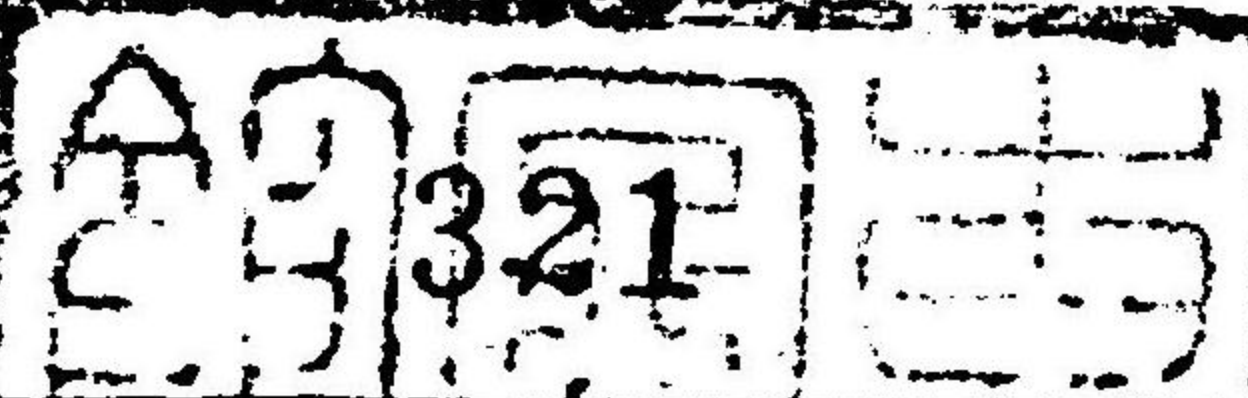
M18.7

ABG-0005



白隠和尚略傳

師名ハ惠鶴號ハ白隠駿河原の人なり幼なき時より僧の
 地獄の苦患を説と聞て大に恐怖し是より出離を求
 むる心あり遂に邑の松蔭寺に入て出家す志ありより
 東西に行脚して志きりに耆徳の門をうかぶ後信州
 の正受老人に参して身心を打失す悟後の修を修し
 て大に宗風を振ひ門下に十餘員の智識を得たり
 實に近世の活僧なり明和五年十二月十一日寂す壽
 八十四 勅して神機獨妙禪師と諡す



安心は二心なき

白隠禪師述

歸命頂禮御擇迦如来やれく皆さん聞てもくんねへおら
 親父を何處のお人も悉多太子か知らぬが佛か若い時
 ら商ひ好んで親の譲の家も位もすはんと打すて十九の年
 から山へはいりて阿羅邏迦蘭の二人の仙人師匠と頼みて
 菜摘水汲薪と樵てな奉公勤めて元手をこころへ十二年目
 に初めて店出し華嚴と名けし結構を代呂物賣てみたれど
 文珠普賢の二人は買たが餘り高くて其餘のお客は盲か聾
 が見向もせぬから是でいいかぬと分別仕替て阿舎と名け

安物賣かけ口上捨れば唐先せわしくお客が来るやら得意が付やらをここで追々代呂物仕入て商ひ手廣に方等般若に法華や涅槃とお客の機と見て夫々あてがふ商ひ上手に須達長者と呼ぶ、金持とゑらふ惚とみ祇園精舎と名高ひ屋敷をば釋迦にあてがひ大店開けハ早速其名が諸方へひろがりどつともなひ程商ひ繁昌天上天下に一人の親玉譽てもくんねへその時賣出す妙法の精藥法華の一法盛んに流行てお若い嬢さん龍女と申が之と買うけどつくり吞込成佛なされた志か、此人文珠の化物智慧があるからさとりも開けた我等が噂といとゑらひ違ひだ又々其時韋提希

夫人と申せし女中は智慧も元手もさつぱりなひのに阿闍世と申して不孝る御太子提婆達多と心を合せて親もお釋迦も舞てのけろと頻婆娑羅王牢屋へをし込憂目に合せたそこで韋提ハ不樂閻浮と此世を厭ふてわたりのやうなる五障三從重き病ひの直る藥りがあるなら下されお願ひまふすとお釋迦に向つて遙かにたのめばお釋迦ハ合點五三の桐だ、此様な客が大かたならふと己前父君淨飯大王其外一門勸め吞せて極樂浄土へ送り届けし秘密の妙方甘露で煉らぐり平等大悲の大事の奥の手大切のゆへ四十餘年のながの月日をを藏へ納めてたしな又置

たがさらば是から賣かりまふやうと法華の南ひく
 休みて阿難目連二人の手代を左右にめし連れ玉宮さして
 る出現あされて韋提希夫人に彌陀の本願他力の念佛五劫
 兆載思惟の薬味ハ諸佛菩薩や六度の行まで一つに合せた六
 字の丸薬一向専念男も女も産前産後もさし合ごさらぬ智
 慧も元手もさづばりいらぬ口にまかせて唱ふるばかりだとう
 で其方ハ心想麻劣未得天眼智慧が虚弱で元手の足らな
 ひお脈も見ぬいた三毒重病まして難治の極重惡病是ら
 の症にハ是より外に用ふる薬ハ決してなひそとも勸め
 された韋提ハ元より五百の侍女まで無始よりこのかた

積りし罪業煩惱疑惑の積氣の持病に三世の諸醫師ハ是を
 扱た大病ありしが其場で現益阿耨多羅汗が流れ
 て即日平愈何と云ふさん六字の丸薬不可思議妙法梵語と
 そのまゝ用ひてみなさい元手のいらぬが肝心要めた餘り無
 造作で祖父婆々だましの古代呂物かとちつくり疑ひ何
 を利口な物ハなひくと知識に問たら直指人心見性成佛ハ
 釋迦ハ即ハち莞爾と笑へハ迦葉がにつこり笑ふと受賣是
 が本法ハ嗣相傳さとり眼を開いて見たれば釋迦も我
 等も是ハ何物本來面目無一物といひたりや又ごあらぬ掘出
 のだく座禪を始めてやりかけましたが膝がぶりくぶり

付ますやら睡りがくるやら背中をどやまれ犬きなる目
 玉爰が何でも辛抱どころと氣張て見たれ三年昔に隣
 へかしたる黒豆三合糠一升思ひ出して忘念山く是も
 我等が性にあひなひ商賣替ふと眞言秘密をどの様な
 物だと尋ねて見たれば阿字本不生で自身の胸にも阿字が
 備はり羅字の元より差別と分れて五智も五大もこの胸一
 つで父母の腹から生れた處に金胎兩部の大日法身直に佛
 の位でござんすと聞くとそのまゝたんあばさまやべいをやりあけ
 たれども元手も持ずに自力の高賣して見るやうかまは
 かばだらにて阿字やら羅字やらさつぱり知れなひをこで

圓頓妙法蓮華の即身成佛さても無上の妙劑なれども尤讀解
 行い我等が下根に及びもなひ故題目ばかりの看板ぐらゐるじや
 出る息ばかりで功能の分らむと元手がなひから危で買れ
 ぶ四十餘年未顯眞實何の事だと尋ねて見たれ六字と
 廣げた法華經八軸故に六字ハ法華の肝要を略にて藥
 王品に妙典八軸吞こむ時に西方極樂阿彌陀の淨土へ生れ
 て往ぞと説てあるとよ何も勘定廻りくして遠道せうより
 路銀のいらぬ南無阿彌陀佛ですぐに往のが二ばん辺みち
 なんと皆さんそうでハなひかへまんだあるぞへみなさん
 きくぬへ鼠じろもで夕飯くはずに二食で暮して飛行たも

つハ始末勘略利口を算用志を我等の虫も虱も取らざらば
 や置かねへ手をば出して盗みいせねども心にわくくて銭金
 持たし鼻もなければ子種がなくなると嘘も少いづねは
 らぬ酒のまね嫁入婚とり振舞その外世間が渡れ
 ぬ何と是で五戒も持てぬこれ尚さら買てがすくなひ
 店さびるが世界のたためだもこれがはやりて賣ひるが
 るり息子も比五さまむすめも尼さまむら役町やく坊主
 あくまで田地も作らむ酒屋もたけれ和尚に嫁入の媒
 酌もあるまひぞれて世間に人種なくなり人間世界が
 ぶれてしまふぞとて我等に自力のあきなりひん

と思へど根氣と元手がなく出て出来ぬとて親父の教
 じまかせて元手のいらなひ他力念佛六字の妙薬我が病
 氣につきり合まきとあかき元手が澤山あるなら自力の商
 ひなされてじろじろ細い元手であきなひ仕かけて棒でも
 折たら逐地も去地も茶の木の畑でお迷ひなざるがむか
 出しを聞てもみなさい十方諸佛が釈迦の證人文珠普賢
 や後佛の彌勒もたかにかに受とる諸宗の祖師たち智慧と元
 手が澤山あれども六字の丸薬たすてはなされぬまして我
 等の智慧も根氣も元手もなひから自力の足なへ他力の
 船に乗より外に分別さざらぬ凡夫がそのまゝ佛になると

ハ石や瓦が不思議に變じて黄金となるのだそれ嘘なら
三味發得なされたれ方に尋ねてごらる何と皆さんう
れいごんだぞ儒道や神道心學かんどがおきなひ敵きで
龜々さまく悪口いうとも我が親父の仕來り南あき格段違
ふたどあらひものたふ根元本店天竺横町それから唐土日本
へ見世たし八宗九宗と商あきひ繁昌弘めた代呂物あきやだと云
たりそたりに居られぬ恐れればいかに聖徳太子や菅公楠
家のあき壁々さまでもれ用ひなさる夫が中にも織田の
信長あきの妙法蓮華のはたをなびかせ軍をなされて大方
天下ハ浴りたれども信心堅固の元手がなひからやうく

一代明智の謀叛にまつはりしまつこまふすも恐ていはれぬ
けれども權現さまハ六字の九藥軍の中あきでもお用ひなさ
れて依求淨土の御旗とをし立天下をなびうせ四海を泰平
御世萬々歳とおうぎあそばす何とみなさんごぞんじあら
ふぐうそでいをひぞへ懸をみなさん手本になされて六
字の九藥家内へすめて朝夕不斷に忘れず用ひバ仕事
しなぐら罪障消滅闇夜の歩行あきもおそれいなひぐりへ四海
靜かに現當あき敏あき榮子孫ハ長久今世の祈禱も來世の利益
も是に過たる藥ハなひぞへ嘘ハつうねへいれみなお釋迦
の味噌でハござらぬ本法のことだふばうらく

明治十八年七月一日出版御届

同 年七月廿五日刊成發丸

京都府平民

校正兼
出版人

西村七兵衛

下京區第三拾組中珠敷屋町馬九郎

二十人講町第貳拾貳番戶